

「保育ゼミナールⅠ」実践報告（１）

木戸 久二子・高岡 光江・神谷 かつ江・内田 恵美子・生島 嘉人・浅野 秀男
(東海学院大学短期大学部)

要 約

本稿は、東海学院大学短期大学部幼児教育学科の卒業必修科目である「保育ゼミナールⅠ」の、令和２年度（2020）における実践報告である。

キーワード：幼児教育、保育、ゼミナール、医療、心理、音楽、スポーツ、造形

はじめに

本学科では、平成31年度(2019)から開設された教職再課程認定及び保育士養成課程の改正に合わせ、専門教育科目に「保育ゼミナールⅠ」「保育ゼミナールⅡ」の二つの卒業必修科目を新設した。どちらも演習の1単位科目で、Ⅰは1年次、Ⅱは2年次での履修とした。「授業の目的・到達目標」にはディプロマ・ポリシーを当て、「授業概要」は以下のとおりである。

学科が目指す人材の育成のために様々な環境を提供し、実践的力量を有する保育者としての資質の形成を目指す。教育・保育現場や地域における実践活動の見学と参加、研究発表会の計画・準備を経ての実践等に主体的に取り組み、子どもたちと実際に関わる中で、幼児教育・保育に対する関心と意欲を高め、自己の専門性について考える。

本学科では、ほぼ全員の学生が幼稚園教諭免許状及び保育士資格を取得し、卒業後は保育者として職に就いている。カリキュラム上の特色として、医療・心理、音楽、スポーツ、造形の「学びの柱」を保育士資格の選択必修科目に設定し、学生それぞれが興味のある分野、得意分野の学びを深めることによって専門性を持った保育者の育成につなげていくことを目指している。

「保育ゼミナールⅠ」では学生それぞれの希望によって医療、心理、音楽、スポーツ、造形の五つの柱に分かれ、研究発表会の計画・準備を経て子どもたちと実際に関わる実践の場を想定して活動してきた。その研究発表の場としては、毎年10月下旬に開催の大学祭「東海祭」を予定していたが、令和２年度(2020)は新型コロナウイルス感染症予防のために、大学祭が中止となってしまった。実際に子どもたちや保護者の方たちと触れ合える実践活動の場を失ったことは非常に残念ではあったが、令和２年は

コロナ禍による緊急事態宣言が発出されて全国的な休校や外出自粛が行われ、東京オリンピックをはじめとする多くのイベントが延期や中止を余儀なくされていた。本学でも、数週間ではあったもののリモート授業が実施され、対面授業開始後はディスタンスを取った座席を指定する等の対策が実施されており、大学祭の中止も想定された事態ではあった。

9月になって大学祭の中止が決定された後は、あらかじめ準備していた代替の授業計画を進めることになった。すなわち、研究発表の場を設けるか否かは各柱に一任し、発表の場を設けた場合もその対象は学生と教職員ということにせざるをえなくなったのである。一方、10月下旬という大学祭の日程に合わせて慌ただしく変則的に準備等を行う必要がなくなったので、毎週1回、1月初めまで余裕を持った日程で授業を行うことができるようになった。

以下、五つの柱ごとに、担当教員による実践報告をお届けする。

<子ども医療>

実施日・会場

令和２年10月7日～令和３年1月11日（11回）
西751教室（あそびの森）

担 当 高岡 光江

参加人数 17名

ねらい

- 1) 子ども自身が事故やヒヤリハットをマッピングできる安全マップを作成する。
- 2) 実際の幼稚園の子どもたちや保護者、教職員が見て、元気になる安全マップとする。

実施内容と学生の学び

子ども医療学概論の授業の一部を先取り学習した後、実在する幼稚園の安全マップをグループ（4~5名/グループ）に分かれて作成した。

1. 先取り学習

- 1) 多様な形と美しい色彩のもつ効果について学ぶ。

「英国の先進事例に学ぶヘルスケアアートとそのマネジメント¹⁾」の動画を視聴し、英国で行われているヘルスケア・アートの実例、エビデンス等について学習した。動画視聴前において学生が抱いていた病院の色は白色が多く、イメージは四角の建物、静か等さまざまな回答が見られた(表 1)。動画の中で印象的だった言葉として、「患者さん自身がアート」や「多様な色や形は患者の回復を助ける」が挙げられていた(表 2)。

動画視聴後、見た人が元気になる安全マップにするためにはどんな工夫があると良いかに対して、全員が原色等ははっきりした色を使うと回答していた(表 3)。

表 1. 動画視聴前段階における学生のイメージ (n=17)

Q. 病院はどんな色で構成されている？	
・白色 (17 名)	・赤色 (3 名)
・淡い色、パステルカラー (6 名)	・うす〜い水色 ・原色が少ない
Q. 病院のイメージ	
・建物が四角 (13 名)	・個室で区切られている (2 名)
・静か (10 名)	・常に命と向き合っている
・暗い (10 名)	・屋根が平ら
・緊張感がある (7 名)	・空気が重い
・大きい (6 名)	・お年寄りが多い
・十字のマーク、赤いマーク (5 名)	・寂しい
・怖い (5 名)	・色々な音が鳴っている
・小さい (4 名)	・騒がしい
・ひんやり (4 名)	・部屋がたくさんある
・統一感 (3 名)	・窓がたくさん
・清潔感、きれい (3 名)	・色々な器具がある
・きれい (2 名)	・古い感じの外観
・慌ただしい (2 名)	・独特のにおい
・広い (2 名)	

表 2. 動画で印象的な言葉 (n=17)

・患者さん自身がアート (12 名)	・怖さや緊張がほぐれる (2 名)
・多様な色や形は患者の回復を助ける (4 名)	・自由な展示スペース (2 名)
・リラックス・リフレッシュできる (4 名)	・外部との連携で幅広いアートを展示できる (2 名)
・楽しくなる (4 名)	・病院に行く時気分が悪くなった経験から病院を改善しようと思った (2 名)
・はっきりとした色・絵 (3 名)	・光を入れる
・アートをたくさん飾る (3 名)	・見る人の気持ちになるように
・病院という感覚がなく (2 名)	・たくさんの色や形のものがある
・嫌なイメージがなくなる (2 名)	・環境のあらゆる面で照明等も関与
・病院にとっても良いイメージ (2 名)	
・ワクワクする (2 名)	

表 3. 動画視聴後 (n=17)

Q. 見た人が元気になるマップになるためにはどんな工夫があると良いか？	
・はっきりした色 (原色、ビビットカラー、鮮やかな色) を使う (17 名)	・クラスによってメインの動物を決める
・立体感や手触りの良い素材を使う (8 名)	・紙を使う
・形をはっきりする (4 名)	・子どもが興味をもつ色や素材を使う
・子どもが興味をもてる仕掛けがある (3 名)	・かわいらしく絵を描く
・カラフルにする (2 名)	・文字も太くはっきり書く
・遊び心がある (2 名)	・隠し要素 (隠れミッキーみたいな)
・一つ一つのものを大きく書く (2 名)	・目を引くような動物などをを使う
・画用紙を貼る (2 名)	

2. 安全マップづくり

- 1) 安全マップを活用したリスクマネジメントについて学ぶ。

園におけるリスクマネジメントの一例として ISS^{注 1)} 認証を受けた亀岡市の取り組み (子どもた

ち自身がケガをした場所にシールを貼ったり、園内パトロールを行う等安全マップの活用方法)を紹介した。

2) 実在する園の安全マップを作成する。

園見学を通して、園舎の構造、事故・ヒヤリハット発生場所を確認する予定であったが、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックのため見学できなくなった。そこで、園舎内・園庭を撮影した動画と設計図、過去数年の事故報告書・ヒヤリハット報告書を提供いただいた。個人情報が含まれる事故報告書等は、授業開始時に配布し、授業終了時に回収するようにした。動画についてはタブレットに保存し、授業時間内に閲覧できるようにした。寄贈先である園の印象については、カラフルな室内、明るい印象・雰囲気等の回答が見られた (表 4)。どんな安全マップが良いかについては、園の雰囲気にか合う原色、はっきりとした色を使うが 12 名と多かった (表 5)。これら資料を基に、安全マップを作成した。

表 4 (n=17)

Q. 寄贈先である園の印象	
・カラフルな室内 (12 名)	・楽しそう (2 名)
・明るい印象・雰囲気 (5 名)	・子どもが自由にのびのびと遊べる環境になっていた (2 名)
・壁が青色や白色等ははっきりした色で清潔感がある (4 名)	・園庭が思ったより小さい (2 名)
・原色をたくさん使っていた (2 名)	・ワクワクする
・賑やかな雰囲気 (2 名)	・刺激がある
・きっちり片づけられている (2 名)	・新しい
・はらぺこあおむしや雲の壁等可愛い飾りつけが多い	・すごく飽きない空間
・空の雲とか見慣れた景色	・前向きな気持ちがある
・クラスによって掲示物が異なる (いも虫とかアルファベットとか)	・外国の雰囲気
・POP な印象	・年齢に合った部屋の大きさ、配置になっている、私が思っていた園と全然違う印象
・部屋のあちこちに物があるイメージだったから驚いた	・遊具が少ない
	・廊下が思ったより狭く、ケガがありそう

表 5 (n=17)

Q. 寄贈先である園にはどんな安全マップが良いか	
・園の雰囲気に合う原色、はっきりとした色を使う (12 名)	・はっきりとした形 ・印象に残りやすいマップ ・危険のレベルを動物で表現する
・見ても触っても楽しめるマップ (6 名)	・もしも〇〇になったら…というイラストを作り、子どもに危険を感じさせる
・子どもに伝わりやすいマップ (6 名)	・指人形みたいなものを作って、実際にマップ上で指を動かしながら探索できる・迷路方式でスタート、ゴールの道中に安全確認しながら何かポイントを集める
・日本国籍でも外国籍でもわかるように目で見え伝える Map (5 名)	
・モールやフェルト、綿等の素材を使って立体感を出す (4 名)	
・各国の動物や食べ物、文化を取り入れる (4 名)	

3. 寄贈した安全マップと期待される効果

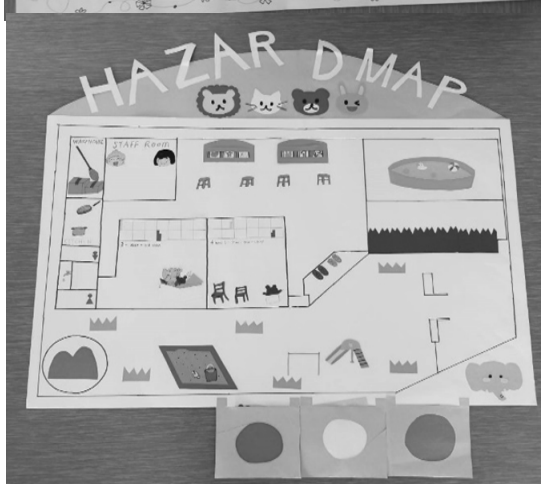
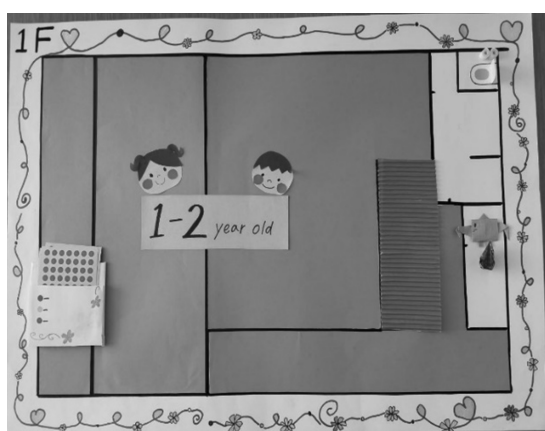
寄贈した安全マップは、学生らによって実際に子どもたちが触って、見て楽しめる安全マップをコンセプトに作られた。本物さながらに小さな紙を丁寧に丸めた本物のようなトイレットペーパー、本棚から取り出せる絵本、触って楽しめるギザギザの素材の階段、見て思わず笑顔になれる笑い顔の子どもや動物たち、長期保存ができそうな本物の植物、楽しんでシールを取り出せるシール保管ボックス等の工夫がなされていた。

亀山市のマップ²⁾は天候 (晴天・雨天) 別に起きた事故やヒヤリハットを色分けし、天候による事故のリスクを分析し、対策につなげていた。一方で、寄贈したマップは、外傷の程度 (通院・治療が必要なもの: 赤色、受診したもの: 緑色、受診の必要はなかったもの: 黄色) 別に事故・ヒヤリハットを見える化できるマップとした。

リスクマネジメントでは、リスクの頻度と深刻度 (損失の程度) を分析し、優先順位の高いものから対策を講じる。一般的には、高頻度高リスク、低頻度高リスク、高頻度低リスク、低頻度低リスクの順に優先される。外傷の程度別にマッピングされた今回の安全マップの場合、赤シールの多い場所が高頻度高リスクの場所とみなすことができる。そこで、まずは赤シールの多い場所で起きた事故を優先的にリス

ク分析する。子どもと教職員で原因（何故起きたのか）と対策（どうしたら防げるのか）を考え、子どもと共にできる対策を実行する。安全マップを使用することによって、子どもと教職員がその施設での危険箇所や危険行動を把握できると同時に、危険箇所や危険行動に対して「あぶない」という危機意識をもつことができる。その結果として重度の傷害（Injury³⁾）の再発予防、低減につながる事が期待される。

安全マップの有効性については、定期的に事故やヒヤリハット件数等アウトカムによって検証していく必要がある。



謝辞

本授業に関して動画等資料をご恵与いただきました A 幼稚園の皆様に心より御礼申し上げます。

本活動は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる緊急事態宣言等、これまでに経験したことの無い事態を受け、現場で頑張る方々、子どもたち、保護者に笑顔や元気を届けたいという思いに賛同してくれた学生さんたちにより実現できたものです。賛同し、協力してくれた学生さんに感謝します。

注

- 1) ISS (International Safe Schools) は、物理的に全く危険がない、100%安全な学校を目指すものではなく、子どもたち自身の安全に対する意識を高め、危険を回避する能力を育むプログラムや体制が構築された学校を目指す²⁾。

引用文献

- 1) 鈴木賢一、なごやヘルスケア・アートマネジメント推進プロジェクト、国際シンポジウム 2019「英国の先進事例に学ぶヘルスケアアートとそのマネジメント(Trystan Hawkins、英国の医療アートディレクターの役割)」
<https://healthcare-art.net/symposium/2019/>、2021.8.26
- 2) Application to become a member of International Safe Schools Network : インターナショナルセーフスクール申請書、2015.
- 3) Editorial, BMJ bans accidents. BMJ, 322:1320-1321, 2001.

<子ども心理>

実施日・会場

令和 2 年 10 月 7 日～令和 3 年 1 月 13 日（11 回）
西 753 教室 東海えほんの森

担 当 神谷 かつ江

参加人数 10 名

1. ねらい

コロナ禍で大学祭が中止となり、前年度まで実施されていたキッズパークの開催が中止された。内容を一部変更して実施した。

- ・メンバーとの触れ合いを通して、コミュニケーションを形成し、協力・協同の大切さを学ぶ。
- ・コラージュによる自己表現を通して、自分の心を見つける体験をする。
- ・心理学に関連したテーマを選び、企画・立案・発表する。

2. 実施内容

内容は3つのねらいに則して紹介する。

ねらい1 メンバーとの触れ合いを通して、コミュニケーションを形成し、協力・協同の大切さを学ぶ。

同じクラスであっても、話したことも関わったこともないという学生たちに、構成的グループエンカウンターを実施した。エンカウンターとは、エクササイズを通してメンバーと「ふれあい」、ふれあうことを通して本音を表現し合い、それをお互いに認め合う体験である。筆者がファシリテーターとなり、メンバー内で簡単におこなえる以下のエクササイズを行った。

(1) 相手を見つけようエクササイズ

くじでパートナーを決める。普段話したこともない者同士が二人1組になることもあるが、それを受け入れ以下のエクササイズを行う。

(2) はじめましてあなたにお任せしますエクササイズ

二人1組になって、片方にはアイマスク、相方はマスクなしで手をつなぐ。7号館8階から2号館3階のピアノレッスン室まで、相方の誘導によって往復する。視界が遮断されるので、互いに声を掛け合い、手を取りながら歩く。ゴール出来たら、交代する。

(3) フリーウォークエクササイズ

全員が黙って782教室を自由に歩きまわる。めったにしないことをするので、おもしろいなあ、変だなあ、照れくさいなあなど、さまざまな感情がわいてくる。そういう感情の交流を体感しながら歩きまわる。

(4) 握手をしようエクササイズ

フリーウォークが終了したら、歩きながら近くの人と握手する。その時は「幼児教育学科の東海花子（例）です。よろしくお願いします。」といって握手する。相手も同様に返答する。それを全員の人と行い、ふれあい体験を交流する。

(5) あなたのことが知りたいですエクササイズ

二人1組のペアが、向き合って座る。二人は互いのことを知らないで、質問を通して相手を理解していく。ペアの内一人が相方に質問する。例えば、「何県出身ですか」「好きな食べ物はなんですか」「部活に入っていますか」など。答えたくない質問には、「パス」と言えばいい。時間は一人4分くらい。終わったら交代する。質問した内容は、次の他者紹介エクササイズで発表するので、覚えておく。

(6) 他者紹介エクササイズ

先ほどの二人1組が全員合流して、円形に座る。人数

が八人と少なかったため、全員参加の円形となったが、人数が多い場合は適宜分割する。八人4組のメンバーに、順番にパートナーを紹介する。時間は一人2分くらいを目安とする。自分のことを覚えてくれた嬉しさは、パートナーへの好感につながっていく。

エンカウターのエクササイズを通して、メンバーと心の交流が深まったので、東海えほんの森へと場所を移動した。東海えほんの森は、地域の乳幼児や保護者、近隣幼稚園や保育園の園児に絵本を親しむ場、交流の場を提供している。絵本、大型絵本、紙芝居など約1,800冊並んでおり、絵本の授業での使用やボランティアとしての絵本の読み聞かせなど、学生たちの保育実践の場として運用されている。学生たちは膨大な絵本の中から、読みたい本を一冊選び、保育者と園児になったつもりで順番に読み聞かせを披露した。紙芝居を選ぶ者、大型絵本を選ぶ者などバラエティーに富んでいたが、真摯な態度で取り組んでいた。

授業が始まると、ウォーミングアップを兼ねて遊戯療法を実施した。遊戯療法は、遊びを通して行う心理療法である。子どもにとって遊びは、生活の中心であり、生きることそのものである。この遊びを利用して言語的交流の困難な子どもの心理療法を行うのが、遊戯療法である。授業ではトランプ遊び、ウノ遊び、カルタ遊びを交代で行い、楽しみながらメンバーと信頼に満ちた温かい関係を形成した。

ねらい2 コラージュによる自己表現を通して、自分の心を見つめる体験をする。

コラージュとはフランス語の「のりで貼る」という意味に由来し、色紙や雑誌、写真を切り抜き画用紙に貼って作品にする心理療法の一つである。絵画のような上手下手がなく、簡単な方法で自己の内面を自ら振り返るという自己表現が可能である。また、制作することを通して、自らが癒されるという効果も持ち合わせている。

子ども心理では、「季節を表現しよう」というテーマを決め、1月から12月までの好きな月を学生に選ばせ、コラージュによる自己表現をおこなった。当方で用意したものは、糊と折り紙、A3の画用紙である。

学生が用意したものは、ハサミ、雑誌、新聞、広告、写真などであった。1月、2月、5月、6月、8月、9月、11月、12月が選ばれた。制限時間は設けなかったが、完成までには3時間近くの時間を要した。完成したコラージュ作品は、7号館5階の掲示板に掲示した。

ねらい３ 心理学に関連したテーマを選び、企画・立案・発表する。

心理学とは、人間の心と身体の関係や行動を解明する科学のことをいい、その研究分野は、発達心理学、教育心理学、臨床心理学、社会心理学と多岐にわたる。学生たちは、入学後に初めて発達心理学を勉強するが、生涯にわたる人格形成の礎が乳幼児期に始まることを知り、幼児教育の大切さを学んでいく。

子ども心理では、学生自身が日頃から興味・関心のある心理学に関連したテーマを選び、企画・立案・発表した。テーマの内容はジャンルを問わず自由。A4用紙２枚程度、イラストを入れたり自分で絵を書いてもよし、引用文献は記載することを約束した。進捗状況を確認、適宜アドバイスをおこなった。

学生たちが選んだテーマは次の通りである。

学生たちが選んだ研究テーマ
摂食障害について
人間の感情について
態度による印象の与え方
自傷行為について
児童虐待について
食べ物の好き嫌いはどうして起こるの
自殺について
HSP(Highly Sensitive)

発表時間は、５分、質疑応答３分の計８分とした。

３．考察

同じクラスであっても、話したことも関わったこともないというメンバーに、構造的グループエンカウンターを実施した。エンカウンターとは、ふれあいを通して、本音で表現し合い、それをお互いに認め合う体験のことである。現代はインターネットやSNSの普及で、生身の人間と触れ合う機会が少なく、孤独感を抱えている人も少なくない。今回のメンバーの中にも、自分から打ち解けようとしなくて、コミュニケーションがとれない学生がみられた。そのような学生にエンカウンターを実施し、用意したエクササイズを一通り行い、ふれあうことを通して関わることの大切さを実感してもらった。回を重ねるごとに、自分から積極的に話しかけるようになり笑顔を見せるようになっていった。

授業開始時に導入した遊戯療法は、緊張した心身を解き放しリラックスさせる効果があった。トランプ遊びでは四人１組になって、ババ抜き・七並べ・神経衰弱をおこなった。かるた遊びでは、「ことわざかるた」、「日本と世界の名作おはなしかるた」など、童心に返って子どもの頃を懐かしんだ。

絵本の読み聞かせでは、抑揚をつける話し方の大切さを学習した。抑揚をつけることで、言葉が聞き手の耳に残りやすくなり、イメージが豊かになること、棒読みでは、聞き手の心に入らないなどを、実演を通して学習した。

コラージュ療法は、雑誌や広告、折り紙などを切り抜き自由に貼っていくので、描画のような上手下手という評価が伴わないので、メンバーにも抵抗なく実施できた。そもそも人は、心の内にあるものを何らかの形で表現したいという思いがあるという。それはコラージュに限らず、箱庭療法でも絵画療法でも同様だといえる。また作品には自分の無意識が投影されるため、完成作品を自ら味わうことは、心の癒しにつながると考えられている。メンバーたちは、自らの作品を鑑賞しながらさまざまな思いを描いているようであった。

研究発表では、メンバーが日頃気になっていたテーマを選び究明した。例えば「自殺」を選んだ学生は、時々死にたい衝動に駆られ、飛び降り自殺をすることが何度かあったという。そんな自分が怖くなり、自殺する人の心理と動機について研究したいと思ったという。調べた学生によれば、一年の中で一番自殺率が高いのは４月～５月。ゴールデンウィークが明けた時期に急増し、希望と現実とのギャップに苦しむ背景があるという。

学生たちが選んだテーマは、実際の自分の経験を取り入れて発表するものが多く、根拠や対処法を明示するので、説得力があった。選ぶテーマは身近なものだが、当たり前の日常を掘り下げて研究するので、共感を得られるものが多かった。

今回の保育ゼミナールⅠは、コロナ禍で学園祭が取止めとなり、キッズパークも中止される事態となった。子どもと保護者と遊ぶ機会もなく、内容も余儀なく変更となったが、メンバーとの触れ合いを通して、コミュニケーションを形成し、協力・協同の大切さを学ぶというねらいは達成できたようである。今後はコロナが早く終息し、当たり前の日常が早く戻ってくることを切に願っている。

引用文献

・ピアヘルパーハンドブック 図書文化社 2009

＜子ども音楽＞

実施日・会場

令和2年9月30日～令和3年1月13日（11回）
西541教室

担当 内田 恵美子

参加人数 11名

活動名「コンサートをつくろう」

コンサート実施日 令和3年1月22日
13:05～13:45

1. 本授業のねらい

毎年「保育ゼミナールⅠ（音楽）」（以下「音楽」）では、本学で開催される大学祭において、遊びを通して音楽が学べる場を設けており、毎年多くの子どもたちと、手作り楽器を作成したり手遊びで一緒に遊ぶなど、様々な音楽での遊びを行っている。

本年度「音楽」を選択した学生には様々な楽器演奏を得意とする学生が多くいたことから、本年度は楽器演奏の発表をすることにした。

本授業のねらいは、仲間と一緒に演奏をする充実感を得たり、子ども達に演奏を楽しんでもらい達成感を得ることであり、その感動によって学生たちが音楽を心から楽しむということである。それだけでなく、子どもの目線に立って子どもが楽しめる音楽とは何かを学ぶため、演奏するだけでなく企画構成や演出方法も学ぶことをねらいとした。1回目の授業で学生に提示した本授業のねらいは次の通りである。

- ・音楽を楽しむ。
- ・親子で楽しめるコンサートを開催する。
- ・コンサートの企画構成や演出方法を学ぶ。

しかし、本年度は新型コロナウイルスの拡大により授業を進めていく途中で学園祭の中止が発表となったことで本授業のねらいを変更せざるを得なくなった。コンサートを子どもたち対象ではなく、学内コンサートに切り替え、学生たちの得意な楽器を演奏できるコンサート内容とした。変更後のねらいは次のとおりである。

- ・音楽を楽しむ
- ・アンサンブルをすることで他者との協調心を育てコミュニケーション能力を高める
- ・他者を認め、それにより個々の向上心を育てる。

2. プログラム

曲目の話し合いでは、各々が演奏したい候補の曲を列挙し、学生全員で話し合いながらプログラミングした。その際の問題点としては、履修学生は全て1年生ということもあり、まだ保育の場を経験しておらず子どもたちが音楽で楽しむ方法の知識が浅いため、学生たちは自分の趣味趣向と子どもたちが楽しめる音楽とを結び付けて考えることが難しい様子であった。そのため、学生たちの演奏したい曲だけでなく、筆者が提示した曲を混ぜながらプログラム構成を進めることとなった。

また、学園祭の中止によるねらいの変更に伴い、コンサートを子どもたち対象ではなく学内コンサートに切り替え、学生たちの得意な楽器を演奏できるコンサート内容とし、その結果、クラシックから軽音楽まで幅広いジャンルとなった。

軽音楽は、クラシック音楽以外のポピュラー音楽全般を指す。学生たちが好む音楽というのはいわゆる軽音楽である。本学の音楽授業では主に「こどもの歌」を教材として扱っているが、保育の場では『パプリカ』など最近の流行している歌の歌唱や踊りをしている場が多く見られ、これらの活動は子どもたちや若い保護者からも人気であるため、音楽授業で取り入れることも必要であると考え。

3. 楽器の調整について

楽器の調整には大きな課題があった。本学の音楽授業でも扱っている「こどもの歌」は簡素なピアノ伴奏と歌であることに對し、軽音楽は様々な楽器を楽器拡声装置（アンプスピーカー）（以下アンプ）を介して使用する。また、本来我々がテレビやネットワークで耳にする軽音楽の音は、アンプや調整機器を使用し音量や音質、バランスを整えたものである。しかしながら、本学にはこれらのアンプを備えていないため、ギターとベースのアンプは学生個々の持ち物で補い、また、音量や音質の調整も整えることができず、バランスを取るのに苦労した。

最も難しかったのはドラムの調整であった。多くのバンド演奏の場では、ドラムの音が大きいためアクリルの遮音板でドラムセットを囲ったり、調整機器で音量のバランスを取りながら、ドラムの音が突出しないよう調整している。本学にはそのようなものがなかったため、練習ではドラムの音で他の楽器の音が聴こえず、練習がうまく進まない場面が多く見られた。そこで、スネアドラムとタムの表面に厚紙を貼り、また、バスドラム

の中に毛布を入れて響きを抑えることによりドラムセットの音量を小さくして他の楽器とのバランスを取った。それによって、ドラム以外の楽器の音が聴こえるようになり、お互いに聴き合いながら練習ができるようになった。

4. 学生の様子

コンサートの曲目は、ピアノソロでの独奏以外は全てアンサンブルであった。楽器編成は、歌、フルート、ピアノ、キーボード、ギター、ベース、ドラム、マリンバ、鉄琴、その他の打楽器である。

アンサンブルの練習をするためには、まずは各々担当の楽器を途中で止まらないで演奏できるようになった後によく合わせて練習ができる。限られた授業内でアンサンブルの練習をするには各自が時間外での練習が必要となる。文科省の省令における大学設置基準では、学生が予習・復習に相当の時間をかけることが定められているため、授業時間外に練習することが必要なのだが、学生にはその認識が希薄であったためアンサンブル練習までかなりの時間を要した。

しかし、回数を重ねていくと、お互いに声をかけ合ったり、教え合ったりする姿が多く見られるようになった。間違えても励まし合い、自分にできないことを褒め合う姿が見られた。まわりが段々上手くなる中で自分の演奏に納得いかず、学校の楽器を自宅に持ち帰っての練習をした学生もいた。さらに、コンサート間近になると積極的に声をかけ合い、空き時間に自主練習を行っていた。

5. コンサート実施について

昨年度は新型コロナウイルスの拡大により、様々な面で感染対策に翻弄された。コンサート開催に際しても、密閉・密集・密接を避け、また、飛沫感染防止のためマスク着用での演奏など、様々な感染対策をしてコンサートを実施した。（図１）

コンサート開催での感染防止対策は次の通りである。

- ・コンサートは15分程度の短時間で行う。
- ・歌唱は一人のみとし、声でのアンサンブルは行わない。
- ・歌唱はマイク使用することにより大声を出さないようにする。

- ・マイクと楽器を使いまわす場合はアルコール等で消毒して使用する。
- ・コンサートの観客は1回の公演につき30人の人数制限をし、公演を2回行う。
- ・人数過多を避けるため整理券を準備する。
- ・窓は換気しマスク着用での演奏とする。

6. 成果と課題

今年度の「音楽」では、新型コロナウイルスの拡大により大学祭が中止となり、授業としての回数が増えることになった。これにより、学生たちが一緒に練習する回数も増え、アンサンブルするには十分な時間が取れたと言える。

学生の姿を見ると、授業で会うごとにお互いの会話も増え、励まし合い、褒め合い、教え合う等の姿が見られた。また、何度も合わせていくうちに上達していく友達の姿に影響されて授業の空き時間や自宅での練習を積極的に行っている姿が見られた。これらの姿は、本授業における「アンサンブルをすることで他者との協調心を育てコミュニケーション能力を高める」「他者を認め、それにより個々の向上心を育てる。」というねらいに対して、学生たちが能動的に行動できたと言える。

軽音楽の楽器に関してはいくつか改善すべき点があるが、本授業のねらいに対する学生の姿には大きな成果が見られたと言える。



図1 コンサートのチラシ

＜子どもスポーツ＞

実施日・会場

令和2年9月～令和12月16日(11回)

東海学院大学西体育館

担 当 生島 嘉人

参加人数 22人

活 動 名 身体活動表現

ねらい

集団による身体表現を学ぶ

保育の領域の身体表現は、かつては「遊戯」と称され、唱歌に合わせて振りをつけた音楽リズム的な内容であったものが、乳幼児の発達や主体性を重視するという保育全般の柔軟な視点への変化にともなって、身体表現あそびとして幼児教育要領の領域「表現」の中に盛り込まれるという改定がなされてきた。

現在の保育領域での身体表現あそびは、子どもたちが自分の感性や知性を活かしてイメージを膨らませ、からだを使って動きを工夫し、表現する喜びを味わうことにねらいが置かれている。

ここでは、身体の動きに触発されて「心」に様々なイメージが浮かんだり、そのイメージから動きが生まれ、またイメージが深化するような「心身相関」という観点から、「心」に響く身体活動を身につけることをテーマに授業を行った。

ねらいとしては、「心」と「身体」に響き合いが生じ、その循環を他者と共有することによって、豊かなコミュニケーションが形成されていく。このよう活動は、言語による表現手段が未熟な幼児期には、最も自然なコミュニケーションの手段になるという考えを基に取り組んだ。

1. ダンス内容

・活動場所…スタジオ

・服 装…活動しやすい格好、室内シューズ

テーマ 『トーチトワリング』

全員でトーチトワリングの技をマスターし、曲に合わせて演技を行う。

曲や、トワリングの技を組み立て、演技構成まで自分たちで考える。

クラスの前で発表会を行う。

評価基準

取り組む姿勢(40点)、表現力(30点)、チーム力(20点)、自己評価(10点)とする。

発表日

2020年12月9日(水)

発表場所

東海学院大学東キャンパス東体育館

2. トーチトワリング(火の舞)

愛知キャンプカウンセラー協会によると、1960年代に蒲郡市のキャンプ場でキャンプファイヤーを実施した際、ある教諭が愛知県内発祥の手筒花火への点火時のパフォーマンスに着想を得て×の字に振り回してから着火したことが始まりで、その後、新体操のこん棒やポリネシアンファイヤーダンスなどの要素を取り入れながら、1970年代後半から多くの学校に広まったという。

名古屋市立の小学校・中学校のうち40校を調べたところ、小学校の半数、中学校のすべてでおこなわれていた。他方、岐阜市の小学校・中学校40校、津市の小学校・中学校40校を調査した結果、野外学習で実施する学校は皆無であった。なお、火の使用は危険であることからケミカルライトを採用する小学校が増えているという。

名古屋市では、市立中学校2年生が野外学習で取り組む伝統行事となっている。名古屋経済大学市邨中学校、高等学校、愛知県立旭丘高等学校、愛知県立大学、愛知教育大学などでは、クラブ活動で取り組む例がある。

『基本技』

大車輪: トーチを体の前方で横向きに大きく回したあと、体の後方で横向きに小さく回す。

風車: トーチを体の前方上部で横向きに小さく回したあと、後方で横向きに小さく回す。

眼鏡: 両腕を左右に広げ手を軸に腕の前後で横回しをする。

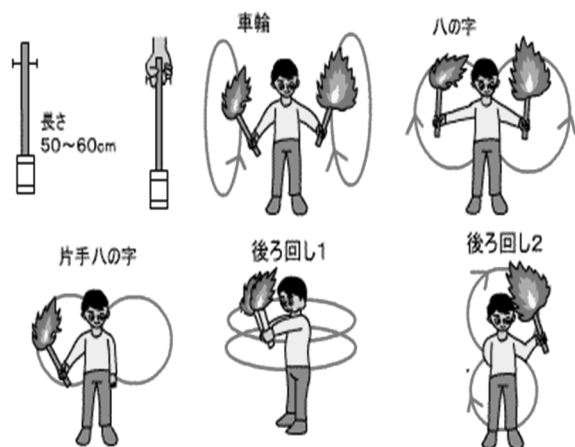
八の字: トーチを前方にいる観客から見て∞に見えるように回す。

弥七: 両手とトーチ棒を揃えて体に添って回し、頭の上で同時に回す技。

トライアングル: 上記の弥七と同様の回転を左右、頭上の三方向でやる技。

時計: 観客から見て3時の針の形になるよう手を構えた後、時計の3、4と5の間、7と8の間、9、12の方向で一回ずつ回す技。

たこ(胴): 両手を開くように出し、足の上でクロスした後、上に上げて体の後ろで両手同時に上45°で一回、下45°で二回回す。



トーチトワリングは、火をより美しく見せるためのテクニックである。しかし、単に“きれいだから”やる……というのであれば、連帯感や目的意識が育たず創意工夫が必要であり、また本物の火を使用する場合は危険を伴うこともあるのでやるべきではない。指導者がしっかりとした目的を持って実施しなければならない。

3. まとめとして

今回のトーチトワリングは保育士、幼稚園教諭を目指す学生に向け、「保育ゼミナールⅠ」の授業として行った。

保育において身体表現活動は様々な形で行われている。明治9年、東京女子師範学校附属幼稚園の開設によってわが国の本格的な幼稚園教育が始まって以来、身体表現活動は「お遊戯」「表情遊戯」「律動遊戯」「リズム」「音楽リズム」「表現」という名称のもと、その目的や方法は時代とともに変遷を遂げている。そこに「リトミック」なども加わり、保育現場での身体表現活動は混乱しているように見受けられる。また、「ミュージカル」といった音楽劇を含む「劇遊び」や子どもの遊びから生まれた「わらべうた遊び」の中にも身体表現は含まれており、多様化した保育内容がうかがえる。

保育における身体表現の歴史的な背景としては、欧米のフレーベル式幼稚園を模し、欧米のフレーベル式幼稚園では唱歌や遊戯が欠かせないものであったために、当然のこととしてこれらが保育に採用されたのであり、教育における「子どもの身体的な発達や精神に与える効用、あるいは発音を正すことなど」というような唱歌教育の目的が少なからず影響していると考えられる。そのため身体表現活動は、遊戯を伴った唱歌や体操において行われていた。

その後様々な変容を経て、身体表現活動は平成元年に『幼稚園教育要領』が5領域となり、「音楽リズム」から「表現」になったことで、感じたことや考えたことなどを音や動きなどで表現することが記されているが、その内容は具体的に示されておらず、現在も様々な保育者研修などが行われる中、保育現場では音楽を伴った身体表現活動を多様な形で行っている。

今回の「保育ゼミナールⅠ」「子どもスポーツ」では、非言語による表現を意識し、誰にでも参加できる「集団ダンス」をテーマとした。参加学生にはまず、トーチトワリングの現状を理解させ、実施する目的意識を高めた。参加学生からは、「すごく楽しかったし、とてもいい思い出になりました」との意見があったが、多くは「こんな危険な行事を子どもたちにやらせるとは」との意見もあった。しかし、現状としては現在も実施している現場があり、教育現場だけではなく、野外活動として実施されている。

「保育ゼミナールⅠ」の目的として、「自分の強みを高める」ということがあり、今回の「トーチトワリング」は集団意識を高める、危険予測、創意工夫が達成されたと考えられる。

4. 今後の対策として

多くの小学校や野外活動現場では、中学生の事故をきっかけに安全対策として火を使わないケミカルライトを取り付けたトーチに切り替える動きも出てきている。

学校での事故に詳しい名古屋大学の内田良准教授によると「感動を呼ぶ学校の伝統行事の中には、子どもを多大なリスクにさらし、それを乗り越えることによって成り立っているものが少なくない。伝統や教育の名のもとにリスクが見えなくなりがちだ」と指摘がある。

昨今の教育現場は多様化が進み現在の教育内容では歪みが見られる。教育的な活動が伝統や仕来りなどではなく、エビデンスに基づいた内容であり、子どもの立場になって教育効果とリスクが見合ったものなのかを教育者や指導者は改めて見直す必要があると考える。

＜子ども造形＞

実施日・会場

令和2年9月30日～令和2年12月16日(11回)

西541教室

担 当 浅野 秀男

参加人数 7名

活 動 名 ジオラマを作る

ねらい

保育の中では造形活動は多様である。子どもたちへの造形教育はもちろんではあるが、他分野でも子どもたちに伝えるためには、言葉での伝達に加え造形的な活動も取り入れられている。そうした状況から、「保育ゼミナールⅠ」の造形分野では、学生たちの造形制作の内容、表現、技術等のより一層の深化を考えて、毎回テーマを設定している。

今回は建築模型をイメージして課題にした。建築模型の正確さや再現性及びその制作過程での手順や技術、また数理的な思考を体験させ、より丁寧に制作することの大切さを感じてほしいと考えた。



一般的な建築模型

丁寧に制作と共にもう一つのねらいは、多素材の使用である。本来造形とは「変容」と言うて良い。多様な素材を変容させることによって表現をすることである。

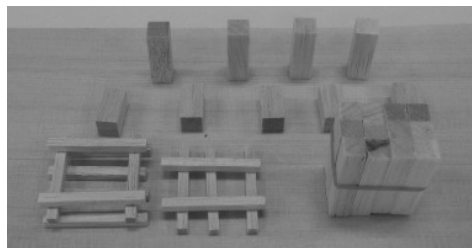
幼児の造形では、建物やモニュメントは段ボールを使用する事が多いが、今回はより正確なものを学生達に制作させたいと思い、建築模型で使われる「スチレンボード」を主に使用した。また細部の制作には「バルサ材」を使用した。スチレンボードはミリ単位の製作ができ、バルサ材は軽く柔らかいので加工が容易である。

着色はアクリル絵の具及び色砂を使用した。

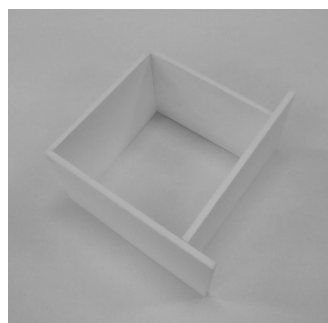
色砂はビニール袋に珪砂とアクリル絵の具を入れ混ぜ合わせて作るのだが、色砂作りは幼児にもでき造形あそびの課題にもなる。この機会に学生たちにも体験させた。

その他、クレー粘土、色画用紙(金、銀)を使用した。

針金やスポンジを使った「植木」の製作も考えてはいたが、残念ながら時間的にそこまでは制作できなかった。



「バルサ材」



「スチレンボード」

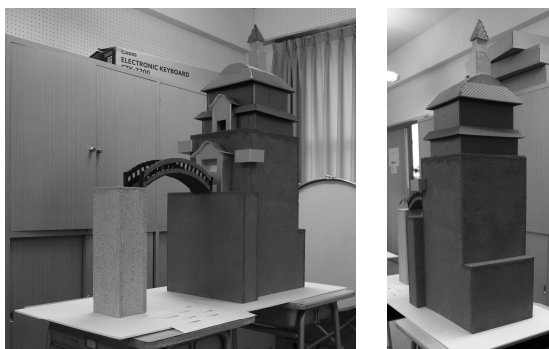
授業の展開

- ①建築模型を示し、制作内容をイメージさせた。
- ②次に学生たちの製作したい物を考えさせ発表させた。
いろいろのものが出たが、最終的にはジブリの「千と千尋の神隠しの油屋」「ログハウス」に決定。
「千と千尋の神隠しの油屋」はかなり複雑であり、困難ではないかとも思ったが、6名で分担制作をすることで決定した。また「ログハウス」は平屋の簡単なものとして2名で制作することにした。
- ③それぞれのモチーフの資料(写真)を集め、簡単なラフデッサンを作り、そこから比率を計算して、寸法を割り出した。予想されていたことではあるが、学生たちは数理的なことが苦手で、比率から制作寸法を出すことに苦労していた。
- ④簡単な正面図、側面図、平面図を指導しながら作り、各学生に作業分担をした。当初は、直角、平行といったことが理解できない学生もいたが少しずつ慣れていったようである。また、「ログハウス」の屋根の三角形の合わせが想像できなかったようである。
- ⑤各パーツで制作を進めたが、具体的な作業の中で、直角定規、スケール、曲尺、カッターの使い方等かなり技術的な細部を指導した。そうしたことも回を重ねることで、学生たちは慣れていった。

「保育ゼミナールⅠ」実践報告（１）

- ⑥各パーツを組み立てる前に着彩をした。刷毛の使い方、絵の具の濃さ、色砂の接着、水溶性絵の具によるスチレンボードの反り等を指導した。
- ⑦着彩が乾いたのを見計らって、組み立てに入った。組みあがった後に、色画用紙を使って、細部の色付けを行い完成させた。

完成作品



「千と千尋の神隠しの油屋」



「ログハウス」

当初から課題としては難易度が高いと思っていたが、想像通り学生たちは苦勞していた。それぞれの工程で、指導することが多く望みすぎたようである。あまり指導をしすぎると、学生たちの達成感が減少する。また、学生たちは非常にまじめに制作に取り組んでいたが、果たしてどの程度楽しめたかと考えると疑問が残る。次回は学生たちが、楽しめる課題を考えてみたい。

おわりに

以上、医療、心理、音楽、スポーツ、造形の順に、令和２年度「保育ゼミナールⅠ」の実践活動を報告した。コロナ禍ゆえに、大学祭を地域の親子と実際に接する研究発表の場とすることはかなわなかったが、受講生にとって柱ごとの分野の学修に主体的に取り組み、学びを深める機会となったことを願ってやまない。

“Children Seminar I” Practical Report (1)

KIDO Kuniko, TAKAOKA Mitsue,
KAMIYA Katsue, UCHIDA Emiko,
IKUSHIMA Yoshito and ASANO Hideo